

# 平安京右京七条二坊四町(西市)跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 平安京右京七条二坊四町 (西市) 跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は、今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できるとなります。

このたびマンション建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

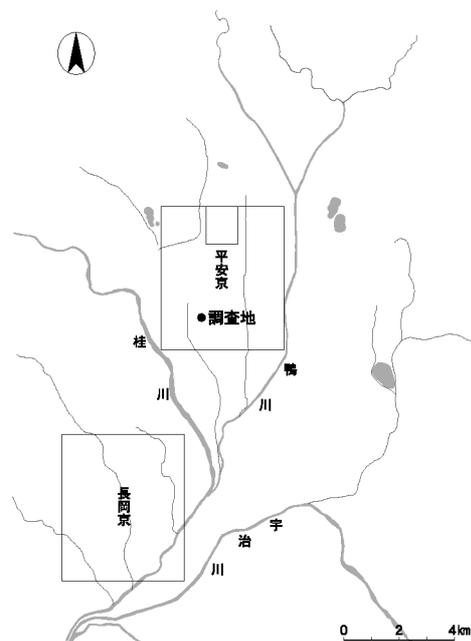
平成17年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京七条二坊四町 (西市) 跡
- 2 調査所在地 京都市下京区西七条中野町29番地
- 3 委 託 者 倶蘭堂ビル株式会社 代表取締役 田口 利夫
- 4 調査期間 2005年 8 月 3 日 ~ 2005年 8 月 29日
- 5 調査面積 190m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500)「西京極」「島原」「中河原」「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系 (改正前) 平面直角座標系 (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点 (一級基準点) を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺 物 番 号 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。
- 14 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺 物 復 元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 柏田有香
- 18 編集・調整 児玉光世
- 19 道具瓦については、浅田製瓦工場の浅田良治・浅田晶久両氏に、漆器については、くらしき作陽大学助教授北野信彦氏に御教示をいただいた。
- 19 本書は、2001年度から発刊してきた『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』を、今年度より書名変更したものである。



(調査地点図)

# 目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	2
( 1 ) 歴史的環境	2
( 2 ) 周辺の調査	2
3 . 遺 構	3
( 1 ) 層序	3
( 2 ) 遺構の概要	8
( 3 ) 江戸時代の遺構	8
( 4 ) 室町時代の遺構	9
( 5 ) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構	11
4 . 遺 物	11
( 1 ) 遺物の概要	11
( 2 ) 江戸時代の遺構出土遺物	12
( 3 ) 室町時代の遺構出土遺物	14
( 4 ) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構出土遺物	16
( 5 ) 平安時代から鎌倉時代の瓦	17
5 . ま と め	17
( 1 ) 西市について	17
( 2 ) 溝119について	18
( 3 ) 調査地付近の景観変遷	19

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1 調査区全景（北から）
		2 柱穴6（南から）
		3 溝56（東から）
図版 2	遺構	1 溝119完掘状況（東から）
		2 溝119断面（西から）
図版 3	遺物	出土遺物

# 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 ( 1 : 2,500 )	1
図 2	調査前全景 ( 南から )	2
図 3	作業風景	2
図 4	調査区配置図 ( 1 : 400 )	3
図 5	周辺調査位置図 ( 1 : 5,000 )	4
図 6	遺構平面図 ( 1 : 100 )	6
図 7	南壁・東壁断面図 ( 1 : 50 )	7
図 8	溝119実測図 ( 1 : 50 )	10
図 9	土壙25出土道具瓦	12
図 10	井戸63出土漆器椀蓋	12
図 11	土壙25出土遺物拓影・実測図 ( 土器・瓦 1 : 4、石臼 1 : 6 )	13
図 12	井戸63出土遺物実測図 ( 1 : 4 )	13
図 13	土壙16・溝56・土取り穴84出土遺物実測図 ( 1 : 4 )	14
図 14	溝119出土遺物実測図 ( 1 : 4 )	15
図 15	土壙152出土遺物実測図 ( 1 : 4 )	16
図 16	平安時代から鎌倉時代の軒瓦拓影・実測図 ( 1 : 4 )	17

# 表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	4
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	12

# 平安京右京七条二坊四町 (西市) 跡

## 1. 調査経過

この調査は、マンション建設に伴うものである。調査地は、平安京右京七条二坊四町にあたり、平安京西市「市町」跡に推定されている。当地にマンションの建設が計画されたため、京都市埋蔵文化財調査センターによる試掘調査が行われた。その結果、中世から近世の遺構が良好に残存していることが明らかになったため、発掘調査を実施することとなり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を担当した。これまでも、西市「外町」での調査は数多く実施されているが、「市町」では、初の本格的な発掘調査となり、関連する遺構・遺物の発見が期待された。

調査は2005年8月3日より開始した。排土置き場等を考慮して、南北19m・東西10mの調査区を設定した。調査面積は約190㎡である。まず重機掘削で遺構面まで掘り下げを行い、排土は10tトラックにて順次積み出しを行った。8月8日から人力での遺構調査を開始した。重機掘削終了面が地山相当面であるため、平安時代末期から近世までの遺構を1面で検出した。主な遺構としては、近世の土壌・井戸・柱穴、室町時代の土取り穴・柱穴・大溝、平安時代末期から鎌倉時代の柱穴などがある。8月23日に調査区的全景写真を撮影し、オルソ測量による実測を行った。最後に、下層確認のため調査区南壁と東壁の一部に断割を入れ、土層断面図を作成し、8月29日に全ての調査を終了した。人力掘削で出た排土は調査区内で処理したが、委託者の意向により埋め戻しは行わず現場を引き渡した。

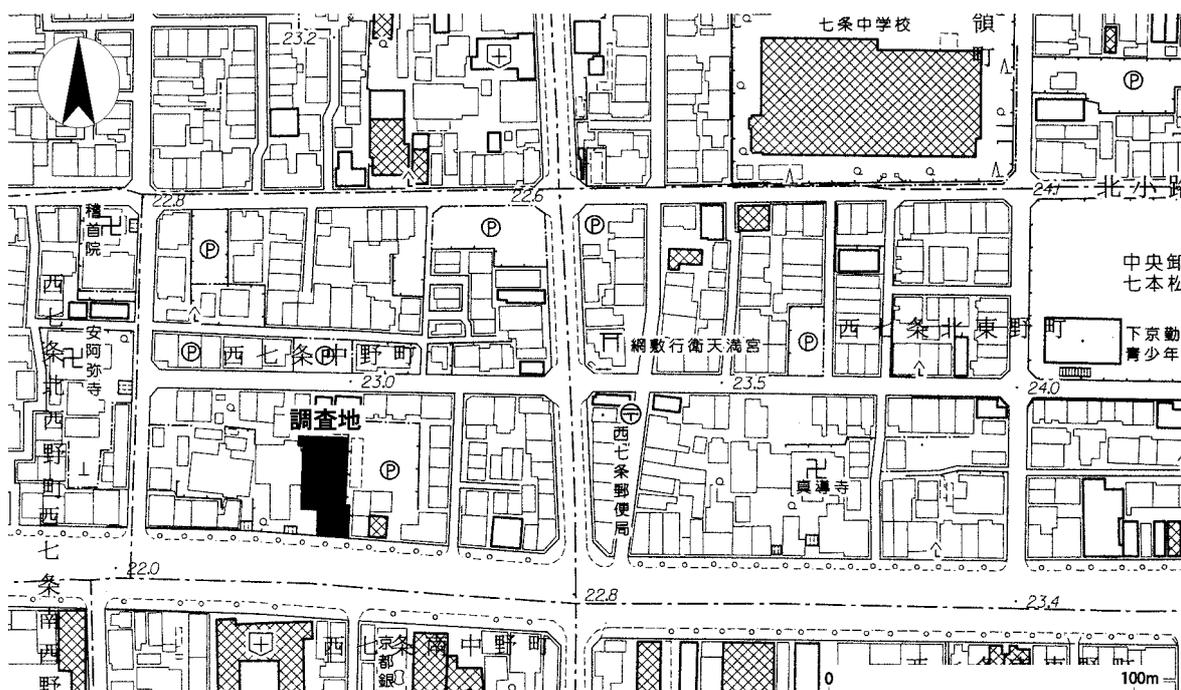


図1 調査位置図 (1:2,500)

## 2 . 位置と環境

### ( 1 ) 歴史的環境

調査地は、周辺を住宅・店舗などに囲まれた市街地で、南側は七条通に面している。京都市遺跡地図台帳<sup>1)</sup>では、弥生時代から古墳時代の遺物散布地の衣田町遺跡と平安京西市跡に該当する。

平安京西市は『日本紀略』によると、延暦十三年(794)七月一日に平安京の遷都に先立って設置された、東西の官営の市の一つである<sup>2)</sup>。東西の市は、それぞれ「市町」が4町、その東西南北に付属する「外町」が8町の計12町を占めており、市司により統括されていた。そのうち西市は、右京七条二坊三町・四町・五町・六町に「市町」、七条一坊十三町・十四町、七条二坊二町・七町・十一町・十二町、八条二坊一町・八町に「外町」があったと推定されており、調査地は「市町」の南東隅にあたる(図5)。

平安京の官営市は、『延喜式』によりその管理・運営・維持について規定されており、東西の市を半月ごとに交代で開くことや、扱う商品も定められていた。西市の独占品としては、錦綾・土器・牛・綿・糖・味噌・絹・麻などがあったが、湿潤な環境が悪条件となり右京域が衰退するに従って、西市も同様に寂れていったとみられ、承和二年(835)に新たに西市だけの専売品を定め、承和八年(841)には西市の東北角の空閑地に官営の金融機関である「右坊城出拳銭所」を設置するなど、市の活性化を図ったようである。しかし、平安時代中期以降の西市の実態はよくわかっていない<sup>3)</sup>。中世になると、この辺り一帯は西七条村と呼ばれ、江戸時代には村内を現在の七条通にあたる老ノ坂越丹波街道が貫き、交通の要衝として、街道沿いに集落が形成された<sup>4)</sup>。

### ( 2 ) 周辺の調査(図5、表1)

これまで西市に関連する調査は、試掘・立会調査を含め、26度実施されている。また、市外ではあるが、西市外町の南、右京八条二坊二町にあたる七条小学校で実施された3度の調査(表1-27~29)でも、市と関連の深い遺構・遺物が出土していることから一覧表に掲載した。これらの調査のほとんどで、平安時代前期の遺構・遺物が確認されている。特に昭和53年度の発掘調



図2 調査前全景(南から)



図3 作業風景

査（表1 - 17）では、板材で護岸された平安時代前期の溝や井戸が検出され、井戸からは市の存在を示す墨書木簡や多量の皇朝銭が出土した。また、昭和63年度の調査（表1 - 25）でも、板材や杭で護岸した南北の溝と東西の溝が検出され、その成果と『延喜式』などの記述をもとに、市内部の区画の復元が試みられている。<sup>5)</sup> 市に関連する建物跡としては、平成9年度の七条中学校の調査（表1 - 4）で、平安時代の掘立柱建物が20棟検出されている。しかし、平安時代中期になると、全体的に遺構・遺物の出土は極端に少なくなり、平安時代後期から鎌倉時代になって再び遺構・遺物の検出が増加している。これは、官営市の衰退以後の手工業者集団の台頭を示唆するものとの指摘がある。<sup>6)</sup>

また、弥生時代から古墳時代の遺物散布地である衣田町遺跡に関連するものとしては、縄文・弥生時代の遺構・遺物が七条一坊十四町、二坊六・七町に分布している。特に昭和55年度の調査（表1 - 3）で検出された方形周溝墓は、弥生時代後期に位置付けられ、周辺には集落が存在した可能性が高い。やや南に離れた八条二坊二町では、古墳時代初頭の遺物が出土している（表1 - 27・28）が、北側の方形周溝墓とは時期差があり、間は当該時期の遺構・遺物の空白地帯となっているため、弥生時代の集落は北側の微高地上に、古墳時代の集落は南側に続く可能性が考えられる。

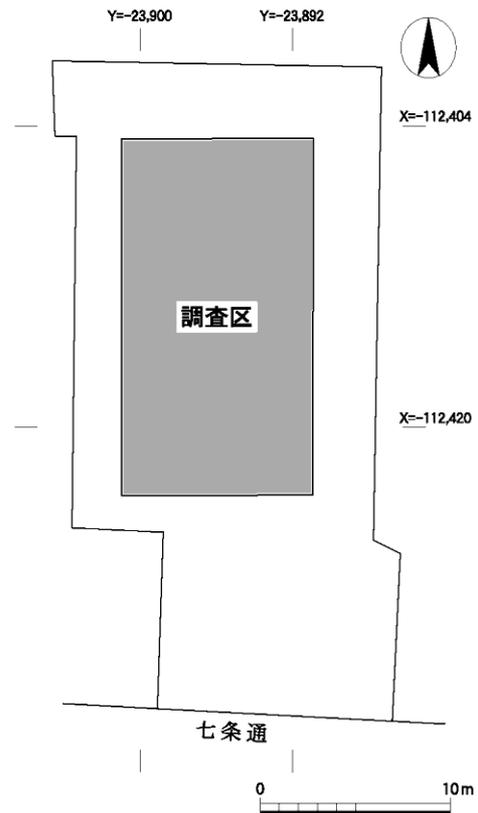


図4 調査区配置図（1：400）

### 3 . 遺 構

#### (1) 層序 (図7)

調査区北半では、旧建物解体に伴う攪乱が、現地表下約1mに及んでおり、その層の直下がこの遺跡のベースとなる黄褐色シルト～極細砂の無遺物層であった。調査区南側では、北側と同様に旧建物解体に伴う攪乱が約30～40cm堆積し（南壁断面2層）、その下に約20～30cmの厚さの近代の遺物包含層（3層）が堆積している。それを除去した層がベースとなる無遺物層（21層）で、10YR6/6明黄褐色シルト～極細砂、10YR4/4褐色小礫混中砂、2.5Y3/3暗オリーブ褐色中～粗砂が互層になっている。葉理が確認できる部分もあることから古い流路堆積であると考えられるが、遺物は含まれず、遺構はすべてこの層より上面から掘り込まれていることから地山相当層と判断した。

また、調査区北側の一部では、部分的にはあるが、10YR4/3にぶい黄褐色粗砂混シルト～極

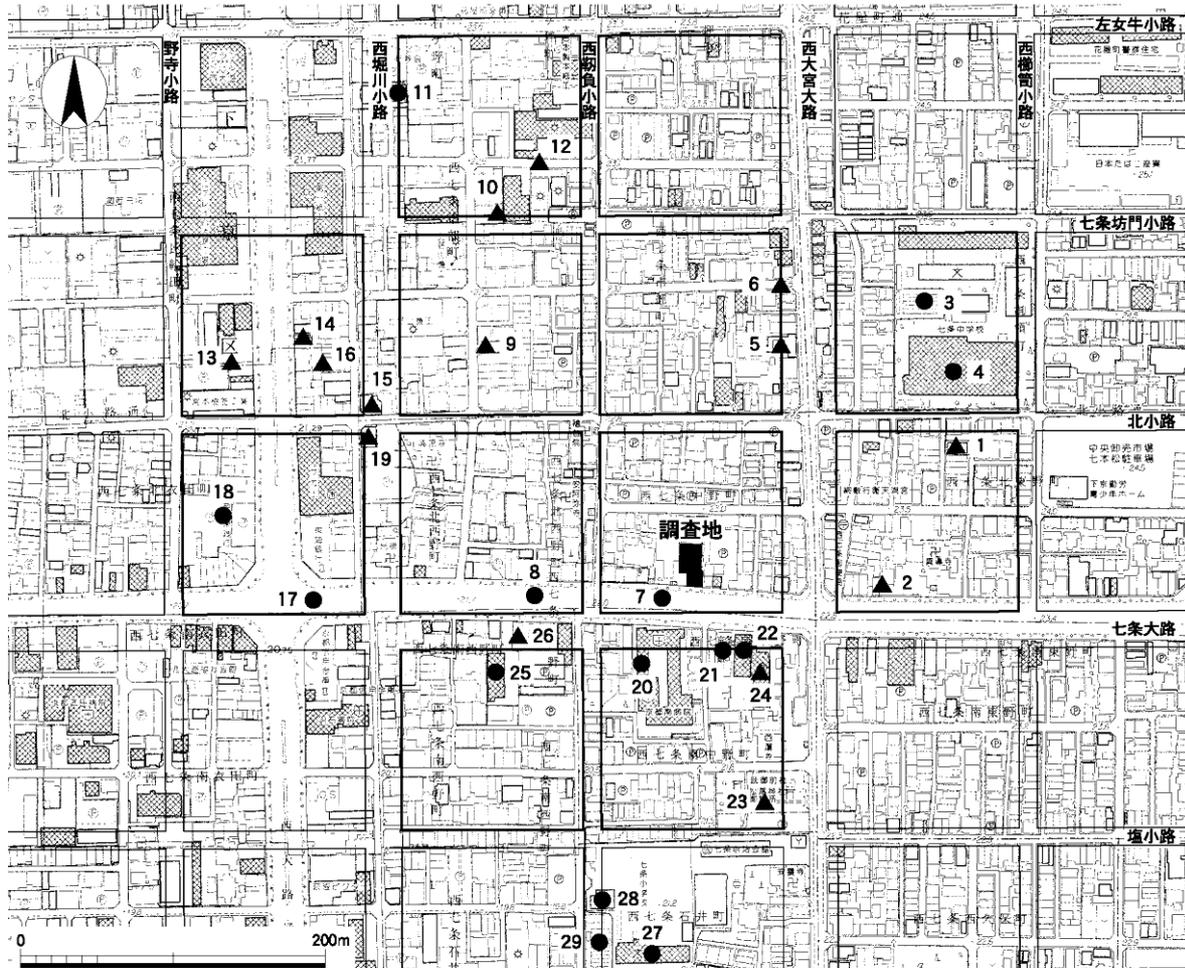


図5 周辺調査位置図(1:5,000)

調査地点の数字は表1の と対応  
●は発掘調査、▲は試掘・立会調査

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	調査方法	調査期間	主な遺構	主な遺物	文献
1	七条一坊十三町 (外町)	立会	1980.04.16	平安時代土壇		『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター1981年
2	〃	立会	1999.03.30 ~04.03	平安末~鎌倉時代土壇	平安末~鎌倉時代土器類・瓦	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局2001年
3	七条一坊十四町 (外町)	発掘	1980.08.26 ~10.20	弥生時代方形周溝墓、 平安時代柱穴・溝・井戸	弥生土器・磨製石鏃、 平安時代土器類・木製品	菅田 薫「東西市」『平安京提要』 角川書店1994年
4	〃	発掘	1997.09.24 ~1998.03.09	平安時代掘立柱建物・ 井戸・溝・柵	平安時代土器類(墨書土器)・木製品(斎申・ 曲物・木釘等)・瓦・ 土馬・銭貨	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概報』(財)京都市埋蔵文化財研究所1997年
5	七条二坊三町 (市町)	立会	1998.05.06 ~05.08	平安前期土壇、西大宮 大路西側溝、平安後期 土壇	平安前期土器類・土馬 ・瓦	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局1999年
6	〃	立会	1999.01.26 ~03.02	西大宮大路西側溝	平安時代土器類	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局2000年
7	七条二坊四町 (市町)	発掘	1977.11.06 ~12.10	平安時代溝・柱穴	平安時代土器類・瓦・ 銭貨	菅田 薫「東西市」『平安京提要』 角川書店1994年
8	七条二坊五町 (市町)	発掘	1977.11.06 ~12.11	平安時代溝・柱穴・土 壇	平安時代土器類・瓦・ 銭貨	菅田 薫「東西市」『平安京提要』 角川書店1994年
9	七条二坊六町 (市町)	立会	1981.05.18 ~05.19	縄文時代落込み、弥生 時代溝、平安時代包含 層		『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局・ (財)京都市埋蔵文化財研究所1982年

No.	遺跡名	調査方法	調査期間	主な遺構	主な遺物	文 献
10	七条二坊七町 (外町)	立会	1980.06.04 ～06.07	遺物包含層	縄文時代晩期深鉢	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター1981年
11	〃	発掘	1983.04.20 ～05.19	平安前期西堀川小路東溝・築地、平安後期～室町時代流路、江戸時代高瀬川の流路	古墳時代から江戸時代の土器類、金属製品、平安時代土馬	『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局1984年
12	〃	立会	1999.01.26 ～03.02	弥生時代竪穴住居か	弥生時代土器	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局2000年
13	七条二坊十一町 (外町)	立会	1980.05.23 ～05.24	平安中期包含層		『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター1981年
14	〃	立会	1982.09.03	平安時代池または湿地	平安前期～中期土器類(墨書合)・瓦・木製品	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局1983年
15	〃	立会	1995.06.23 ～06.27	平安時代包含層		『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』京都市文化市民局1996年
16	〃	試掘	2004.09.10	平安後期～鎌倉時代柱穴・土壇・溝・流路		『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局2005年
17	七条二坊十二町 (外町)	発掘	1977.11.06～ 12.11、1978. 02.01～03.09	平安時代溝・柱穴・土壇・井戸	平安時代土器類・銭貨・木製品(木簡)	菅田 薫『東西市』『平安京提要』角川書店1994年
18	〃	発掘	1997.05.12 ～09.12	平安時代柱穴群・井戸・土壇・区画溝、中世耕作溝	平安時代土器類・銭貨・木製品(曲物・井戸枠)	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1997年
19	〃	立会	1987.03.12	平安時代包含層・溝		『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局1987年
20	八条二坊一町 (外町)	発掘	1979.01.16 ～01.28	平安前期井戸、鎌倉～室町時代の柱穴群、安土桃山～江戸時代の井戸・柱穴・土壇	平安前期の土器類・曲物・銅銭・斎串、中世～近世の土器類	『平安京西市跡 南病院中棟新築工事に伴う発掘調査の概要 昭和53年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所1980年
21	〃	発掘	1981.07.17 ～08.12	七条大道路面・側溝、平安後期～室町時代のピット群	平安後期～室町時代の土器	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所1982年
22	〃	発掘	1989.06.12 ～09.02	平安～江戸時代の七条大道路路面・側溝、平安時代区画溝・井戸、鎌倉～室町時代区画溝・井戸・柱穴・土取り穴、江戸時代井戸・土壇	平安時代土器類・瓦・銭貨・木製品、鎌倉～室町時代土器類・瓦・鉄滓、江戸時代土器類・石製品	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1990年
23	〃	立会	1990.08.09	平安後期土壇		『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局1991年
24	〃	立会	1996.05.13 ～05.21	平安時代包含層	平安時代緑釉陶器・灰釉陶器	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局1997年
25	八条二坊八町 (外町)	発掘	1987.12.14 ～1988.02.13	平安前期土壇・溝・柱穴、平安後期～鎌倉時代の井戸・土壇・柱穴、江戸時代の井戸・土壇	古墳時代土器類、平安前期土器類・銭貨・木簡・斎串・軒瓦、	『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局1989年
26	〃	立会	1998.12.08 ～12.10	平安時代包含層	平安時代土器類・灰釉陶器	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局1999年
27	八条二坊二町	発掘	1983.06.10 ～07.28	池状遺構、平安時代掘立柱建物、室町時代土壇墓	古墳時代の土馬・墨書土器・木簡	『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1984年
28	〃	発掘	1985.08.30 ～10.20	平安時代西鞠負小路・区画溝・流路	平安時代土器類・瓦・銭貨・木簡・動物骨	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1988年
28	〃	発掘	1993.12.16 ～1994.04.07	平安時代流路・西鞠負小路路面・側溝・掘立柱建物・柵	古墳時代土器類、平安時代土器類(墨書土器)・木製品(紀年銘木簡・祭祀具)	『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所1997年

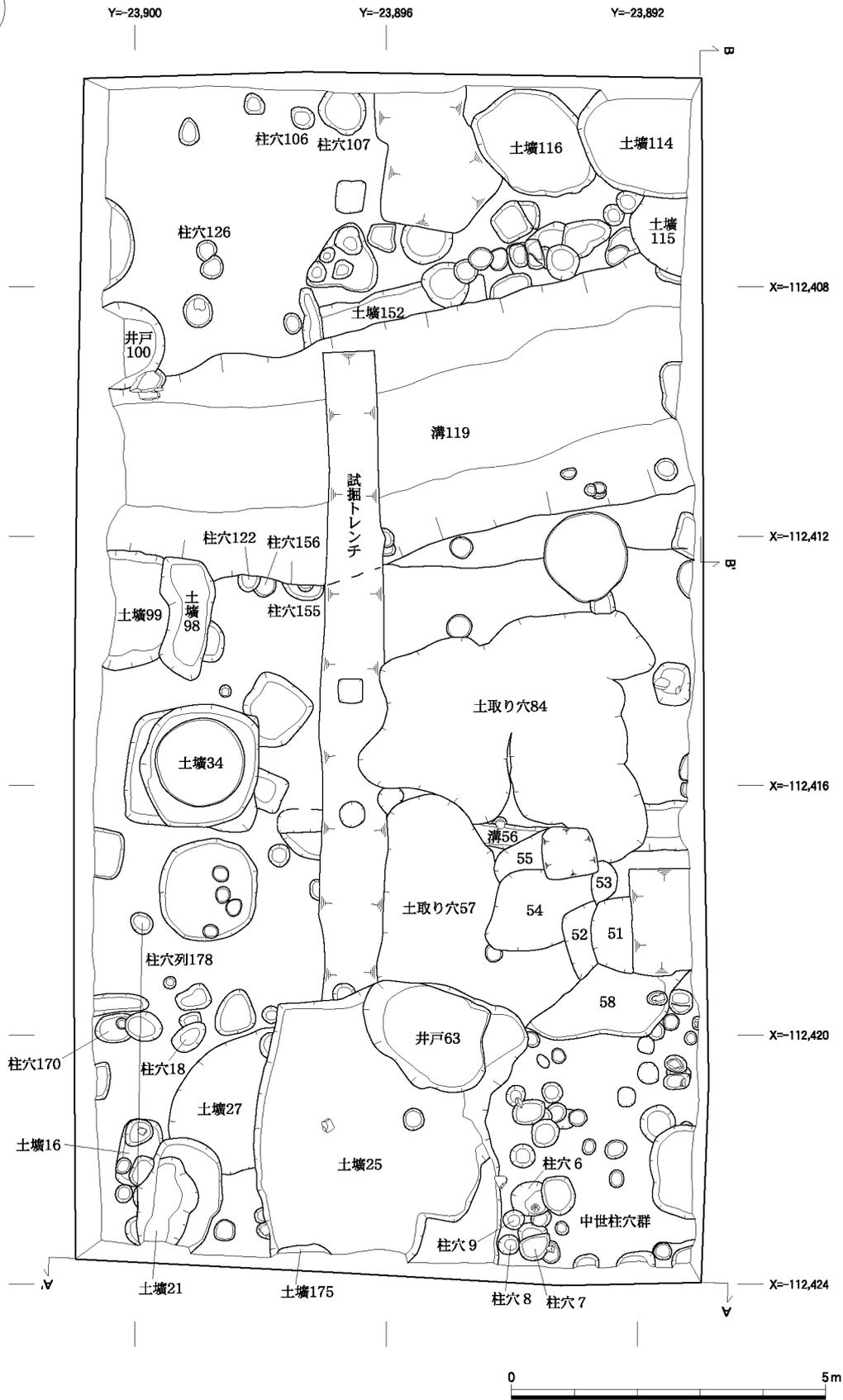
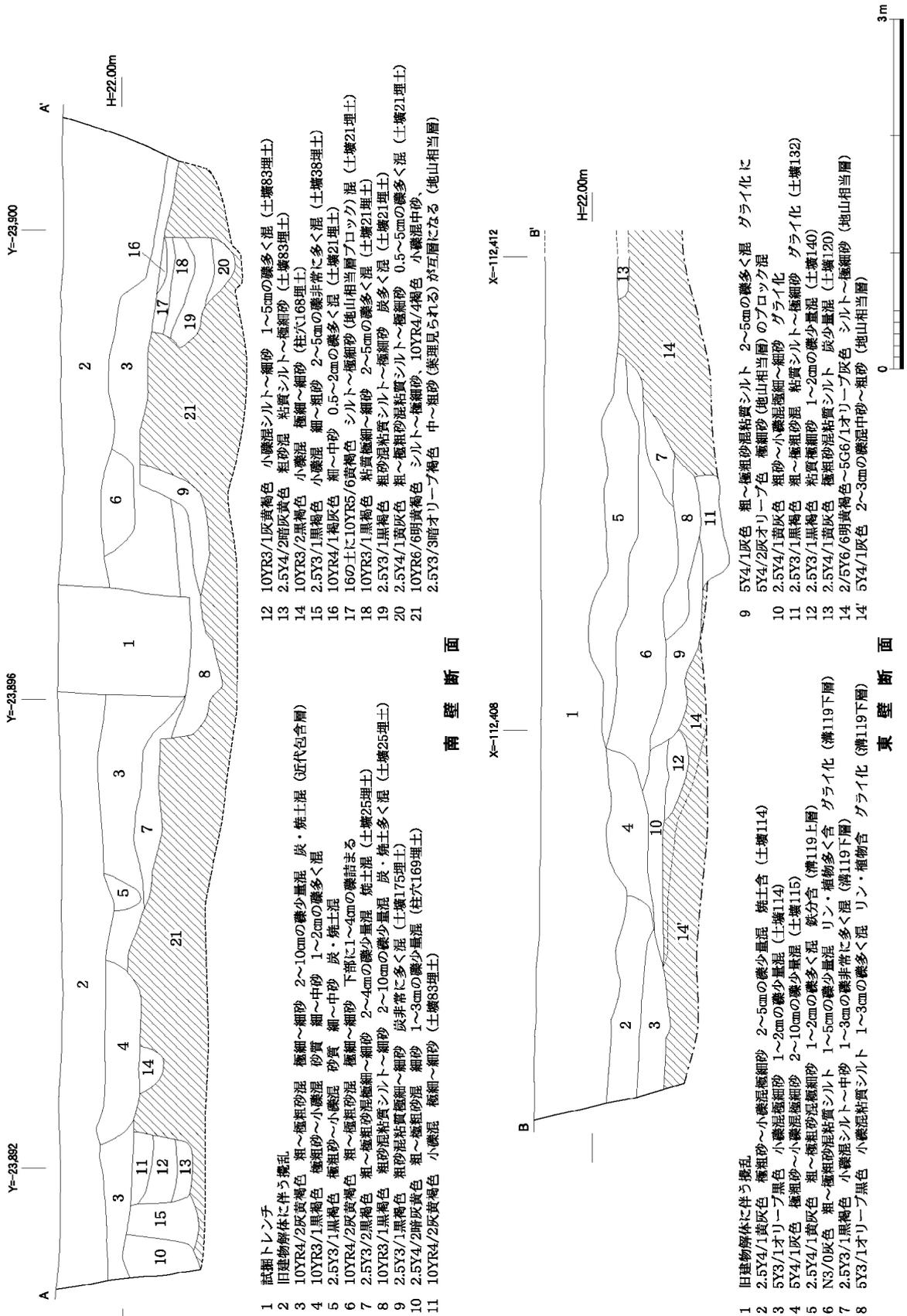


図6 遺構平面図(1:100)



- 12 10YR3/1灰黄褐色 小礫混シルト～細砂 1～5cmの礫多く混 (土壌83埋土)
- 13 2.5Y4/2階灰黄色 粗砂混 粘質シルト～細砂 (柱穴168埋土)
- 14 10YR3/2黒褐色 小礫混 粘質シルト～細砂 (柱穴168埋土)
- 15 2.5Y3/1黒褐色 粗～中砂 2～5cmの礫非常に多く混 (土壌38埋土)
- 16 10YR4/1黒褐色 粗～中砂 0.5～2cmの礫多く混 (土壌21埋土)
- 17 160の土に10YR5/6黄褐色 シルト～極細砂 (地山相当層プロック)混 (土壌21埋土)
- 18 10YR3/1黒褐色 粘質極細～細砂 2～5cmの礫多く混 (土壌21埋土)
- 19 2.5Y3/1黒褐色 粗砂混粘質シルト～極細砂 炭多く混 (土壌21埋土)
- 20 2.5Y4/2階灰黄色 粗～極粗粘質シルト～極細砂 0.5～5cmの礫多く混 (土壌21埋土)
- 21 10YR6/6明黄褐色 シルト～極細砂、10YR4/4褐色 小礫混中砂、2.5Y3/3階オリーブ褐色 中～粗砂 (美理見られる)が互層になる (地山相当層)

南壁断面

- 1 試掘トレンチ
- 2 旧建物解体に伴う擾乱
- 3 10YR4/2灰黄褐色 粗～極粗砂混 極細～細砂 2～10cmの礫少量混 炭・焼土混 (近代包含層)
- 4 10YR3/1黒褐色 極粗砂～小礫混 砂質 粗～中砂 1～2cmの礫多く混
- 5 2.5Y3/1黒褐色 極粗砂～小礫混 砂質 粗～中砂 炭・焼土混
- 6 10YR4/2灰黄褐色 粗～極粗砂混 極細～細砂 下部に1～4cmの礫詰まる
- 7 2.5Y3/2黒褐色 粗～極粗砂混極細～細砂 2～4cmの礫少量混 焼土混 (土壌25埋土)
- 8 10YR3/1黒褐色 粗砂混粘質シルト～細砂 2～10cmの礫少量混 炭・焼土多く混 (土壌25埋土)
- 9 2.5Y3/1黒褐色 粗砂混粘質極細～細砂 炭非常に多く混 (土壌175埋土)
- 10 2.5Y4/2階灰黄色 粗～極粗砂混 細砂 1～3cmの礫少量混 (柱穴169埋土)
- 11 10YR4/2灰黄褐色 小礫混 極細～細砂 (土壌83埋土)

- 9 5Y4/1灰色 粗～極粗粘質シルト 2～5cmの礫多く混 グライ化に
- 5Y4/2階オリーブ色 極細砂 (地山相当層)のプロック混
- 10 2.5Y4/1黄灰色 粗砂～小礫混極細～細砂 グライ化
- 11 2.5Y3/1黒褐色 粘質シルト 粘質シルト～極細砂 グライ化 (土壌132)
- 12 2.5Y3/1黒褐色 粘質極細砂 1～2cmの礫少量混 (土壌140)
- 13 2.5Y4/1黄灰色 極粗粘質シルト 炭少量混 (土壌120)
- 14 2/5Y6/6明黄褐色～5G6/1オリーブ灰色 シルト～極細砂 (地山相当層)
- 14' 5Y4/1灰色 2～3cmの礫混中砂～粗砂 (地山相当層)

東壁断面

- 1 旧建物解体に伴う擾乱
- 2 2.5Y4/1黄灰色 極粗砂～小礫混極細砂 2～5cmの礫少量混 焼土含 (土壌114)
- 3 5Y3/1オリーブ黒色 小礫混極細砂 1～2cmの礫少量混 (土壌114)
- 4 5Y4/1灰色 極粗砂～小礫混極細砂 2～10cmの礫少量混 (土壌115)
- 5 2.5Y4/1黄灰色 粗～極粗砂混極細砂 1～2cmの礫多く混 鉄分含 (溝119上層)
- 6 N3/0灰色 粗～極粗粘質シルト 1～5cmの礫少量混 リン・植物多く含 (溝119下層)
- 7 2.5Y3/1黒褐色 小礫混シルト～中砂 1～3cmの礫非常に多く混 (溝119下層)
- 8 5Y3/1オリーブ黒色 小礫混粘質シルト 1～3cmの礫多く混 リン・植物含 グライ化 (溝119下層)

図7 土壁・地盤断面図 (1 : 50)

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	遺物包含層	
平安時代末期 ～鎌倉時代	柱穴18・106・122・126・155・156・170、土壙116・152	
室町時代	柱穴6、柱穴列178、土壙16、溝56、土取り穴84、溝119	柱穴列178は柱穴13・77・23・81で構成
江戸時代以降	柱穴7～9、土壙21・25・27・34・114・115、土取り穴51～55・57・58、井戸63・100	

細砂の平安時代前期の遺物包含層を確認した。この包含層上面の標高が南側の地山相当層上面の標高とほぼ一致するため、低い箇所にもみ堆積したものが、もしくは、より広域に広がっていたものが削平され部分的に残存したものと考えられる。

## (2) 遺構の概要

検出した遺構の総数は178基である。埋土の相違や出土遺物から見て、18～19世紀（江戸時代中・後期から近代）、17世紀（江戸時代前期）、14世紀後半～16世紀（室町時代）、12世紀後半～14世紀前半（平安時代末期から鎌倉時代）の各時期の遺構に分けられる。出土遺物が乏しく時期を決定できない遺構を除いて、江戸時代の遺構が最も多く、次いで室町時代の遺構が多いが、それ以前の遺構は少ない。

## (3) 江戸時代の遺構

江戸時代の遺構は、全て地山相当層上面で検出した。

江戸時代中期から後期（18～19世紀半ば）に属する遺構には、土壙25・34・98・99がある。

調査区南側に位置する土壙25は、約4m×4mの方形の範囲を検出したが、南はさらに調査区外に続いている。深さは0.5～0.6m、南壁断面8・9層がこの土壙埋土で、炭や焼土が多く混じる。割れた瓦や陶磁器類、木製品などの遺物が多量に含まれることから、廃棄土壙であろう。調査区中央西側に位置する土壙98・99は、炭と焼土が混じり、棧瓦が大量に含まれる。土壙25と類似した様相を示すことから、同様に廃棄土壙と考えられる。その南に位置する土壙34は、約2m四方の方形の掘形内部に、直径約1.4mの円形の木枠が組まれていた。埋土は5Y4/1灰色の粘質極細砂～粗砂、深さは約0.4mで、底部はほぼ水平である。礫層まで掘り抜かれておらず、浅いことから井戸ではなく肥溜と考えられる。

江戸時代前期（17世紀代）の主な遺構には、柱穴7～9、土壙21・27、土取り穴51～55・57・58、井戸63・100、土壙114・115がある。柱穴7～9の他、この時期の柱穴は調査区の南端に集中する。

土取り穴51～55・57・58は、地山相当層の中でも均質な粘質シルト層の部分を掘り込んでいる。

また、壁が挟りこまれていること、礫層まで掘り抜いていないことなどから土取り穴と判断した。それぞれ不正形で、深さは最も深い部分で約1.2mある。埋め戻しの時間差により埋土に差異が認められるため個々に遺構番号を付したが、ほぼ時期差はないものと思われる。調査区南西にある土壌21・27も、粘質シルト層を掘り抜いていることや、壁面の挟り込みから土取り穴であろう。土壌21の埋土は南壁断面図16～20層で、中から寛永通寶が1枚出土している。調査区南に位置する井戸63は土壌25により上半が壊されており、正確な規模は不明である。残存部から推定すると、本来は一辺1.7m程度の方形の掘形で、直径1.4m程度の円形の木枠が組まれたものであったと考えられる。検出面から約1mで底に到達し、最下部では枡の一部と思われる木製の板材が出土した。17～18世紀代の遺物が出土するため、最終的には18世紀に入ってから埋められたと考えられる。調査区北西の井戸100は、西半分が調査区外に続くため東半部分のみを検出した。直径約1.3mの円形の掘形を持つ井戸で、木枠は残存していない。検出面から約1.2m掘り下げた所で底を検出した。底部は地山相当層の中でも、2.5Y3/3暗オリーブ褐色中～粗砂の砂礫層に達している。調査区北東隅に位置する土壌114・115は、ともに円形の掘形を持つ土壌である。底部は水平に近い。井戸とするには浅く、砂礫層まで掘り抜かれていないため性格は不明である。東壁断面図2・3層が土壌114埋土、4層が土壌115埋土である。土壌115は、中世の溝119を削平している。

#### (4) 室町時代の遺構

室町時代(14世紀半ば～16世紀)の主な遺構には、土壌16、溝56、土取り穴84、溝119、柱穴列178、その他柱穴群がある。

土壌16は、調査区の南西に位置し、規模は南北1m、東西0.7m、深さ0.3mである。柱穴列178を削平し、15世紀末～16世紀前半頃の遺物が出土している。溝56(図版1-3)は、調査区中央やや南よりに位置する東西方向の溝である。幅約0.3m、深さ約0.3m、底部がほぼ水平で、断面形は正方形に近い。底部は東から西に徐々に浅くなり、調査区の中央付近で終息する。ほぼ正方位で、布掘状の形からも区画溝の可能性が考えられる。15世紀末～16世紀初頭の遺物が出土している。土取り穴84は溝56の北に位置する。約4m四方の範囲にわたって掘り込まれ、凹凸が激しい。15～16世紀初頭頃までの遺物が出土している。

調査区の中央やや北寄りに東西方向に走る溝119(図8、図版2)は、旧建物解体に伴う攪乱直下で検出したため、上部は削平されている可能性があるが、現状で幅約4m、深さ1.25mで底部は東から西に傾斜する。調査区東端では幅約5mとなり、北に約15度振れる。断面形は、下部がほぼ水平な底部から垂直に近い角度で立ち上がる逆台形状で、上部は30～40度の傾斜で立ち上がり、全体として2段に落ちる形状を示す。上層約35cm(1・2層)は、礫を多く含む人為的に埋め戻された土である。下層(3～6層)は、動植物遺体の多く混じる粘質土層で、部分的に葉理が確認できる流路堆積である。最下層の6層は、炭や植物遺体を含む粘質シルトの流路堆積に、地山相当層の緑灰色極細砂ブロックが混じる。水勢により地山を削りながら堆積していった様子が窺える。出土遺物は、13～14世紀頃のもの少量含まれるが、溝の底部で出土した土師器は

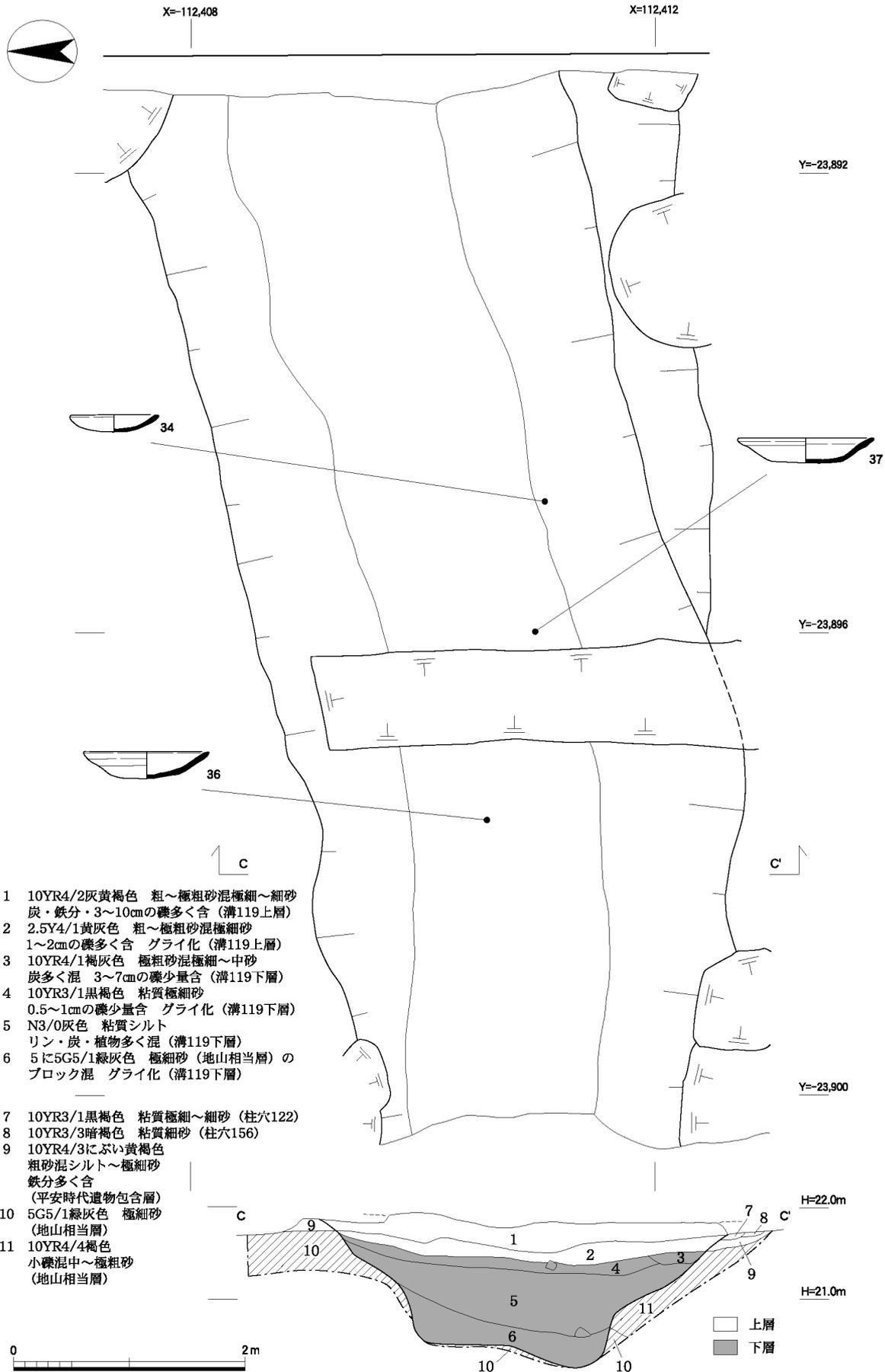


図8 溝119実測図 (1 : 50)

16世紀後半に位置づけられる。グライ化した水分を多く含む堆積土であることから、漆器などの木製品も良好に残存していた。また、一部埋土をサンプリングした結果、アカザ・ウリ・ナス・オオムギなどの種実や珪藻、スッポンや魚の骨、昆虫などが含まれていることも判明した。上層の1・2層には、下層より古い15世紀末～16世紀初頭頃の遺物が多く含まれる。

その他、この時期の柱穴群は、調査区の南側に集中する。溝119の北側にも数基認められるものの、南側に比して相対量は少ない。柱穴群の中には、根石や柱材が残るものがあり、深さも様々である。柱穴6には直径約14cm、残存長約45cmのスギ材の柱が残存していた(図版1-2)。これらの密集する柱穴群は、掘立柱建物の建て替えによるものと考えられるが、重複が激しく、時期を特定できる遺物が乏しいことから、建物を復元するには至らなかった。唯一調査区南西端で南北方向に並ぶ柱穴列178が認められた。柱間は約1.7mで、調査区内では南北3間分を検出している。柵列か、西側に延びて建物跡となる可能性がある。

#### (5) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構

平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～14世紀前半)の遺構には、土壙116・152と、その他柱穴がある。出土遺物から当該時期と判別できた遺構は12基で、数は少ないが、調査区全域に分布している。

土壙116は、調査区北東に位置する。直径約1.7m、深さ約0.25mの不整形の土壙で、底部は水平である。埋土は炭混じり粘質シルトで、14世紀初頭頃の遺物片が少量含まれる。土壙152は、南半分を溝119に削平される、東西幅約2.7m、南北幅約1mの東西に長い長方形の土壙である。検出面からの深さは約0.3m、底部は水平で、垂直に立ち上がる。埋土は10YR3/1黒褐色粘質粘土～シルトで、13世紀後半～14世紀初頭の土器や、鞆の羽口、鉄塊が出土している。

この時期の柱穴には、調査区南西の柱穴18・170、溝119に切られる柱穴122・155・156、調査区北側の柱穴106・126がある。全て検出面からの深さが10～20cm程度と浅く、埋土には炭・焼土が混じる。柱穴122・155・156付近には、平安時代前期の遺物包含層が堆積し、これらの柱穴はその上から掘り込まれている(図8断面図)。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

遺物は、遺物コンテナにして27箱出土した。平安時代から江戸時代のものがある。江戸時代のものが最も多く、時代が遡るにしたがって出土量は少なくなる。種別では、土器・陶磁器が大半を占めるが、瓦や木製品、石製品、金属製品も少量ながら出土している。以下に各時期の遺構ごとの出土遺物についてまとめる。なお、溝119出土の平安時代から鎌倉時代の軒瓦に関しては別項目とした。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器	5箱	軒丸瓦1点、軒平瓦1点	4箱	0箱
	瓦、軒瓦				
鎌倉時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、土製品	9箱	土師器1点、須恵器2点、輸入磁器1点、轆羽口1点	6箱	1箱
	軒瓦		軒平瓦1点		
	石製品、金属製品		漆器2点、木製品8点、石鍋1点、金属製刀子1点		
室町時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器	18箱	土師器19点、須恵器1点、瓦質土器3点、施釉陶器1点、輸入磁器3点	11箱	5箱
	平瓦、丸瓦		土師器1点、施釉陶器2点、磁器5点		
	木製品、石製品、金属製品		軒丸瓦2点、道具瓦2点		
江戸時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、輸入磁器、土製品	32箱	漆器1点、石臼1点	21箱	6箱
	棧瓦、軒瓦、道具瓦		土師器1点、施釉陶器2点、磁器5点		
	木製品、石製品、金属製品		軒丸瓦2点、道具瓦2点		
合計		32箱	61点(5箱)	21箱	6箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

## (2) 江戸時代の遺構出土遺物

土壌25(図11) 1は、京・信楽系の皿である。見込み部分には梅の文様が描かれ、透明釉が



図9 土壌25出土道具瓦

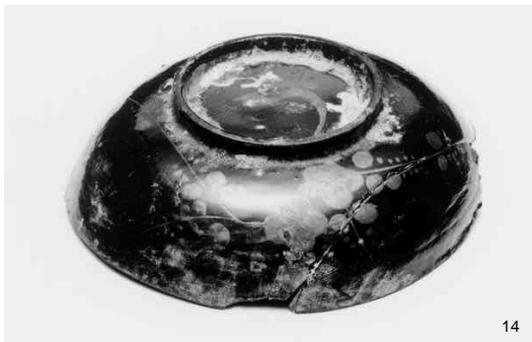


図10 井戸63出土漆器椀蓋

かかる。2~4は、肥前系の磁器で、2は菊花文のコンニャク印版の椀である。見込み部分は蛇ノ目釉剥ぎ。3は外面無文、内面二重斜格子文の皿で、同じく見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。4は草花文の油壺で、内面は無釉。いずれも18世紀後半頃に位置付けられる。5・6は、巴文軒丸瓦である。5は、巴文の尾は左巻き、外縁幅が広く、大きい珠文が密に配される。6は、巴文の尾は長く右巻き、外縁幅はやや狭く、珠文の配置間隔は5より広い。7・8は、道具瓦である。7は、平瓦部が湾曲せず平らで、瓦当は蕨手状唐草文である(図9)。瓦当部の上下幅は、向かって左側が狭くなっている。瓦当面の成形時には雲母が使用され、光沢がある。瓦当貼り付け式段顎で、上面は未調

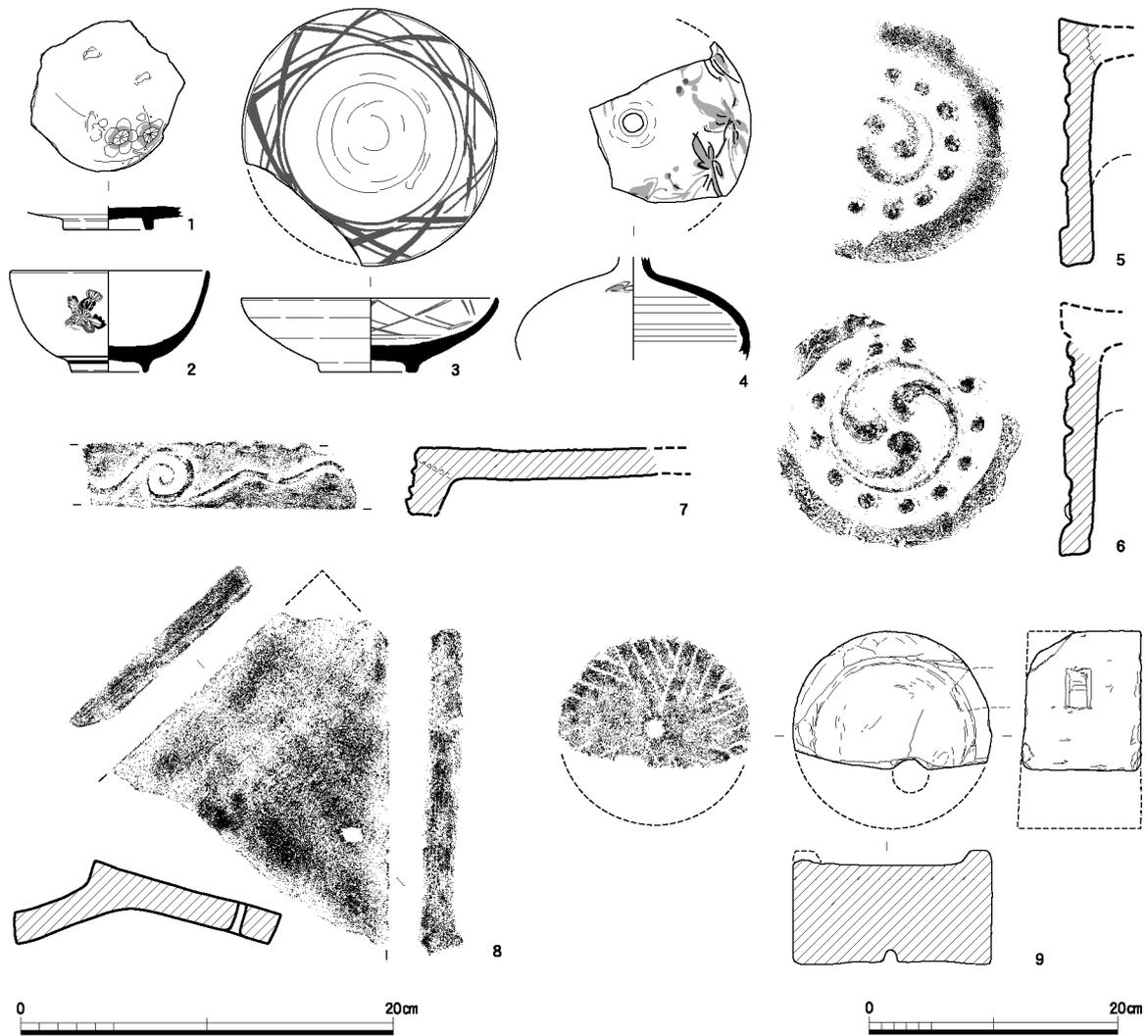


図11 土壙25出土遺物拓影・実測図（土器・瓦1：4、石臼1：6）

整、下面は頸部から全体的に丁寧な横ナデを施す。砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で色調は灰白色を呈する。鬼瓦の台となる可能性がある。8は、築地塀に葺かれる塀内隅瓦である。組み合わせて括り付ける針金を通す方形の孔が開き、先端は組み合わせの際に重なる部分を意図的に打ち欠いている。9は、砂岩製石臼の上臼である。臼面の直径は約15.5cm、器高9.5cmで、上面は皿状に窪ませ、直径約2.5cmの供給口が貫通する。臼面の中心に芯棒受けがあり、側方に方形の横打込穴が開く。臼面の擦目は4本単位の8分画で、各擦目の間隔は約1cmと粗い。全体の1/3が欠損している。

井戸63（図12） 10は、肥前系の施釉陶器である。削り出し高台で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、内面には灰釉がかかる。17世紀中頃に位置付けられる。11は、17世紀後半頃の瀬戸・美濃産鉄釉陶器で、壺もしくは

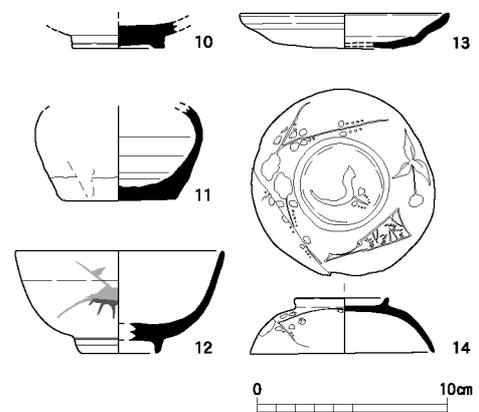


図12 井戸63出土遺物実測図（1：4）

花瓶の体部である。底部は糸切りで、底部外面を除き全面に釉薬がかかる。肥前系磁器の椀12は、外面は草花文で、内面は無文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。13は土師器皿で、内面底部と体部の境に浅い凹線状の圏線がめぐる。口縁端部から内面は横ナデ、体部外面は指オサエで、18世紀前半頃に位置付けられる。14は、漆器椀の蓋である（図10）。内面は赤漆、外面は黒漆が塗られる。器壁は薄く、繊細なつくりで、外面には銀で、羽子板・梅・桐の文様が描かれている。

### （3）室町時代の遺構出土遺物

土壙16（図13） 15は、瀬戸・美濃産鉄釉陶器の托である。天目茶椀を乗せる椀状部分の下に皿状の羽が付く形状で、出土例は少ない。胎土は緻密で、色調は灰白色を呈する。15世紀代のものであろう。

溝56（図13） 16・17は、白色系の土師器皿で、15世紀末～16世紀初頭頃に位置付けられる。16は、復元口径7.8cm、口縁端部から内面は横ナデ、外面は指オサエ。17は、口径9.8cm、口縁端部から内面は横ナデ、外面指オサエで器壁は厚い。18・19は、中国製の輸入磁器である。白磁の皿18は、体部と口縁部の境で強く屈曲し、稜をもつ。復元口径は14.8cm、釉薬はやや青みがかかる。15世紀末～16世紀初頭頃のものであろう。19は、青磁鎬蓮弁文椀である。蓮弁部の盛り上がりは明瞭で釉薬はオリーブ色を呈する。13世紀代に龍泉窯近辺で製作されたものと考えられる。

土取り穴84（図13） 20～23は、白色系の土師器皿で、そのうち20～22は底部が上方に突出するいわゆる「へそ皿」である。23は、口径12cmの中型、口縁端部は強い横ナデにより上方に突出する。内面の体部と底部の境に凸線状圏線がめぐる。24・25は、瓦質土器である。24の羽釜は、内面横ハケ目、外面は指オサエナデ。25の奈良火鉢は、獣脚付きで、外面の口縁部直下に2条の凸帯をめぐらし、間に花菱文のスタンプを押す。以上は全て15～16世紀初頭に製作されたものと

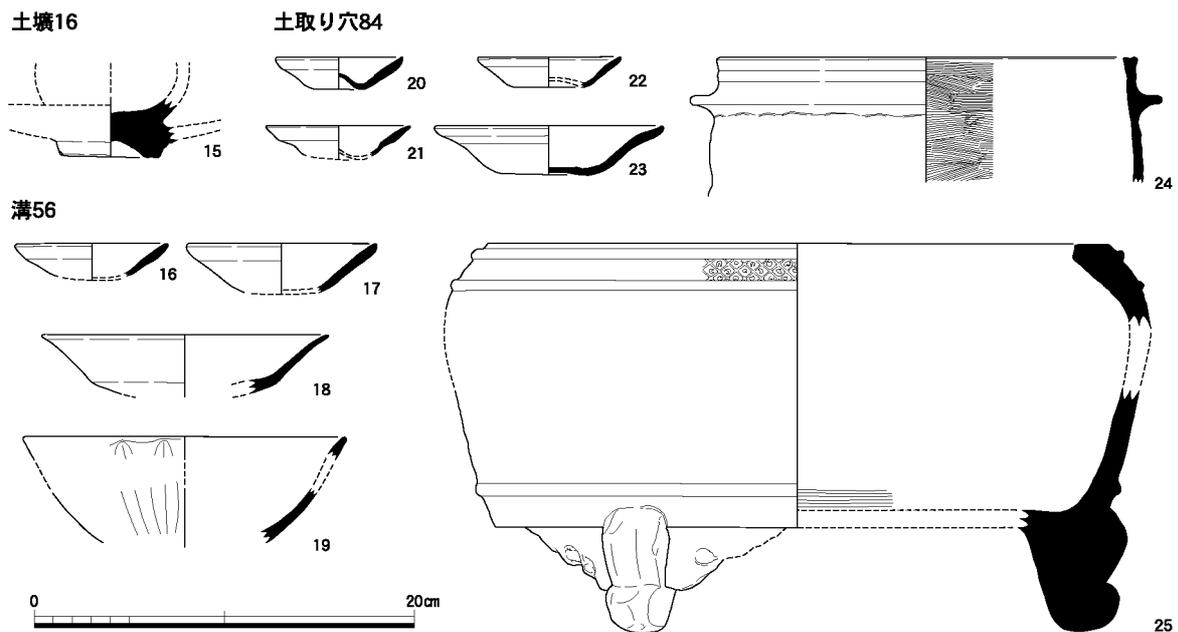


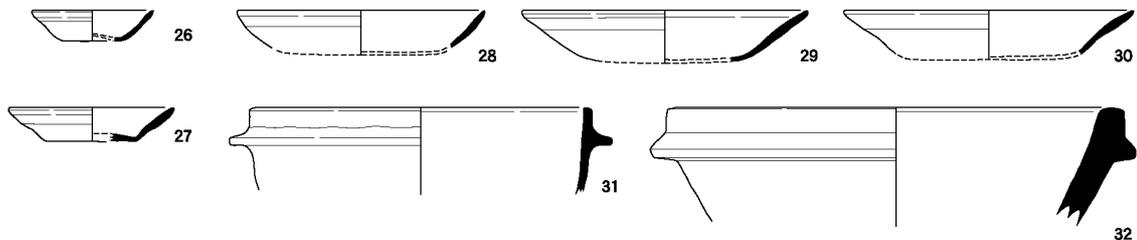
図13 土壙16・溝56・土取り穴84出土遺物実測図（1：4）

考えられる。

溝119上層(図14) 26~30は、土師器皿である。26は白色系の「へそ皿」で、16世紀初頭頃のもの。27は、赤色系で内面に凹線状の圏線がめぐる。白色系の28~30は、いずれも胎土は精良で、器壁は薄い。15世紀末頃に位置づけられる。31の瓦質土器の羽釜は、復元口径17cmで内外面ともにナデ調整、15世紀末~16世紀初頭のものである。32は、滑石製の石鍋で、復元口径は23cmである。口縁部直下に断面台形状の削り出しの鐳がめぐる。14世紀末~15世紀初頭頃に製作されたものと考えられる。<sup>7)</sup>

溝119下層(図14) 33~40は、土師器皿で、そのうち34・36・37は、溝の底部で出土した(図8)。33・34は赤色系の小型皿で、33は内面横ナデ、外面指オサエ、胎土は精良である。34はほぼ完形で、内外面ともに丁寧な指ナデ調整を行う。35~40は白色系である。35は、口縁端部が強い横ナデにより上方に屈曲する。内面横ナデ、外面は指オサエである。36は完形で、口縁端部に煤が付着する灯明皿である。丸底で口縁端部から内面は横ナデ、外面は指オサエで、器壁は薄

溝119上層



溝119下層

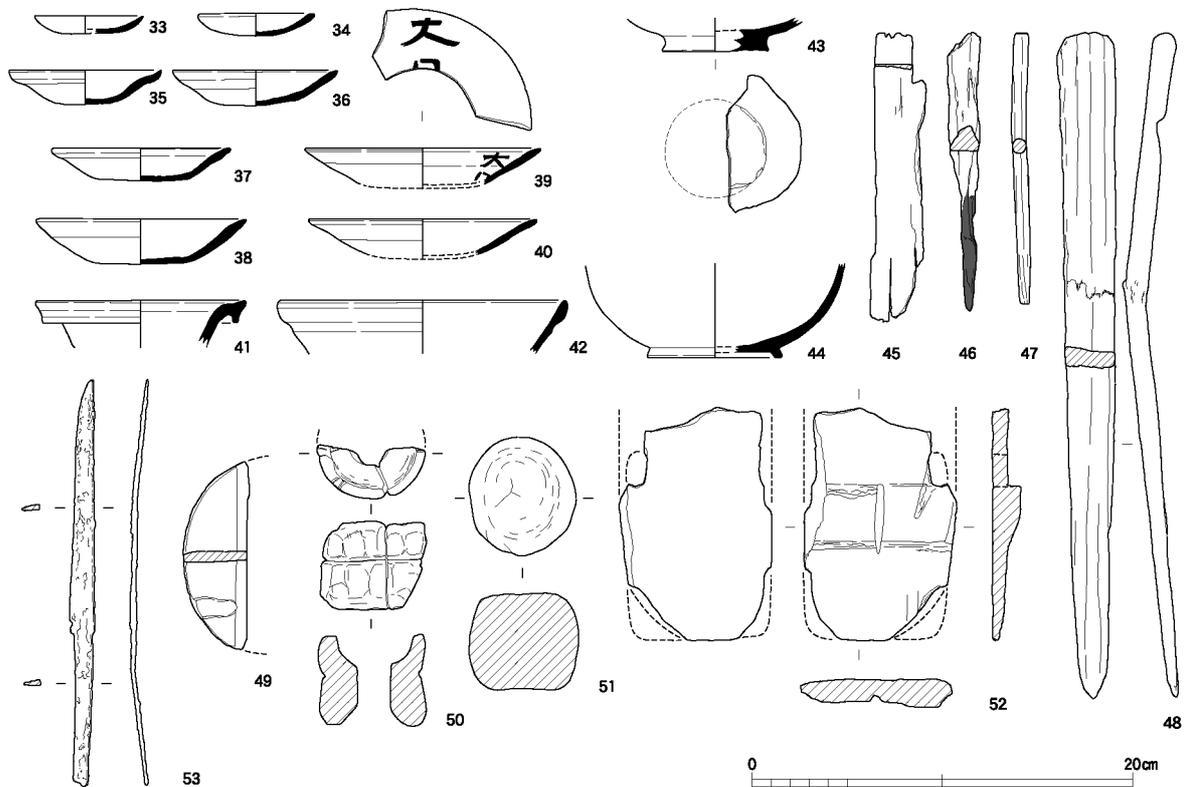


図14 溝119出土遺物実測図(1:4)

い。37は、口縁端部を強く横ナデすることにより、外面の指オサエ部分との境に明瞭な段がつく。38は、内面底部と体部の境に横ナデによる凸線状圏線がめぐる。39は、口縁端部から内面は丁寧な横ナデ、外面はナデ、体部は直線的に立ち上がる。胎土は精良で焼成は堅緻、色調は灰白色を呈する。内面に「大」の墨書がある。40は口縁端部から内面は横ナデ、外面指オサエ、胎土は精良で焼成は堅緻、色調は灰白色である。35・36・38は16世紀初頭～前半、それ以外はやや新しく16世紀半ば～後半頃に位置づけられる。41は、須恵器の壺で、復元口径は10.8cmである。頸部は斜上方に立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は上下方に肥厚する。8世紀末～9世紀初頭の所産と思われる混入品である。42も、混入の中国製輸入白磁椀である。復元口径は15cm、口縁端部は玉縁状になり、釉薬の色調はややくすんだ灰色を呈している。11～12世紀代のものであろう。

43～52は、木製品である。43は内面赤漆、外面黒漆塗りの漆器椀で、高台内は削らない。44も漆器椀である。内面赤漆塗り、外面黒漆塗りで、文様は認められない。45の木筒状木製品は、文字等は確認できないが、表裏ともに丁寧に削り、平滑な面を作り出している。46は、細く削り出した先端部約6cmが炭化していることから、火付け木であろう。用途不明の47は、断面円形に、先端は細く加工している。48は、表裏・側面とも加工し、平滑に仕上げている。厚みは0.5～1cmで、先端を尖らせ、広端部から約5cmの部分に抉りを入れている。用途は不明。49は蓋で、復元径は11cm、厚みは約0.5cmである。50は、「振々」と呼ばれる遊戯具である。中心に直径1.8cmの孔が貫通し、上面は皿状に削って窪ませている。外面は面取りを施し丸く仕上げ、中程よりやや上方に紐を巻き付けるための溝をめぐらす。51は、用途不明であるが、上下面は平坦に、側面は丸く削り出す。下駄52は、台と歯を一本の木から削り出したもので、破損するが、鼻緒孔の痕跡が確認できる。53は鉄製の刀子で、刃部の長さは13.5cm、柄部分の長さは8cmである。

#### (4) 平安時代末期から鎌倉時代の遺構出土遺物

土壌152(図15) 土師器皿の54は、口径7.8cm、器高1.2cmで、口縁端部から内面は丁寧な横ナデ、外面はナデ調整である。口縁端部は丸みをもつ。胎土は精良で焼成は堅緻、色調はにぶい橙色を呈する。13世紀後半頃のものである。55は、中国製輸入白磁椀で、口径は11.8cm、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は強く外反する。釉薬はやや緑色がかかる。13世紀半ば～14世紀

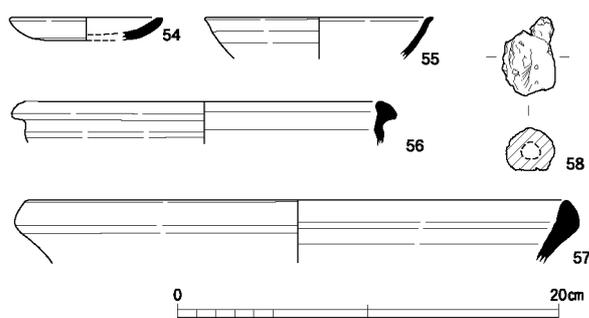


図15 土壌152出土遺物実測図(1:4)

初頭に位置付けられる。56・57は、須恵器の鉢である。56は口径18.2cmで、口縁端部を上下方に肥厚させる。57は、口径28cm、口縁端部は上方に立ち上がり断面三角形となる。58は、鞆の羽口である。胎土には砂粒が多く混じり、二次焼成により外面の一部が赤く変色する。

### (5) 平安時代から鎌倉時代の瓦(図16)

59・60は、溝119上層から出土した軒瓦である。溝の埋め戻しの際に混入したものと思われる。59は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、平城宮6291A型式の搬入瓦である。中房に1+6個の蓮子が配され、複弁の周囲に輪郭線がめぐる。輪郭線の基部は中房に接する。蓮弁には楔形の間弁がある。外区内縁には、16個の珠文が蓮弁に対応して配置され、外区外縁には線鋸歯文がめぐる。丸瓦部は厚く、接合位置が低い。さらに、瓦当裏面が台形状を呈することから、この軒丸瓦は一本造りの可能性が高い<sup>8)</sup>。胎土は精良で、焼成は硬質、色調は灰色である。平安宮中和院で同範瓦<sup>9)</sup>が、平安京右京七条一坊の西鴻臚館推定地で同文異範の瓦が出土している<sup>10)</sup>。60は、均整唐草文軒平瓦

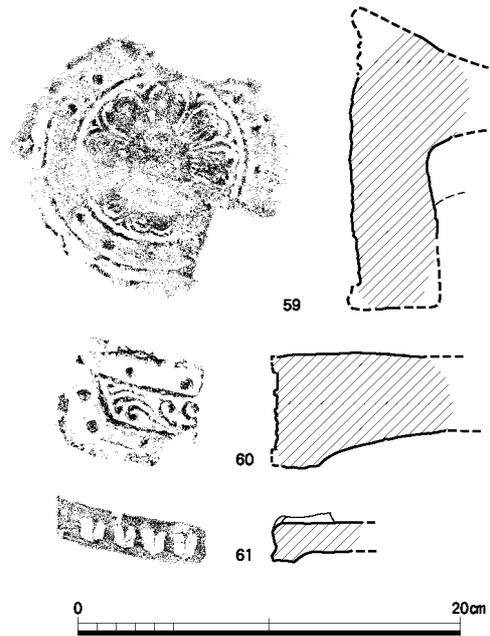


図16 平安時代から鎌倉時代の軒瓦  
拓影・実測図(1:4)

瓦である。内区は、外行の唐草文を配し、外区には珠文をめぐらせる。珠文と外縁の高さは高い。曲線顎で、顎部から平瓦部凸面の屈曲部にかけては、横方向のナデ、それ以外は縦方向のヘラケズリ。平瓦部凹面は、瓦当から5cmは横方向のヘラケズリを施し、それ以外は細かい布目が残る。側面もヘラケズリである。胎土は砂粒を多く含み、焼成は硬質、色調は灰色を呈する。9世紀前半頃に製作されたものと思われる。西賀茂角社瓦窯や平安宮大極殿、豊楽院で同文異範の瓦が出土している<sup>11)</sup>。

61は、溝119下層から出土した剣頭文軒平瓦である。折り曲げ技法によるもので、瓦当面に布目が残る。顎部から平瓦部凸面の屈曲部にかけては横ナデ、それ以外は未調整である。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は硬質、色調はにぶい橙色である。12世紀末～13世紀初頭頃の所産と考えられる。

## 5.まとめ

### (1) 西市について

今回の調査では、直接的に西市と関連付けられる平安時代前期に遡る遺構は検出されなかった。しかし、出土遺物に関して言えば、後世の遺構への混入ではあるが、9世紀代にまで遡る土器や瓦が出土している。特に59の複弁8弁蓮華文軒丸瓦は平城京からの搬入瓦である。また、60の均整唐草文軒平瓦は、おそらく平安時代前期の中でも早い段階に西賀茂瓦窯で生産されたものであろう。搬入瓦は平安宮域、その中でも初期に造営された地区で多く出土することがわかっている。

また搬入瓦と岸部瓦窯・西賀茂瓦窯で生産された軒瓦を混用して使用する例は、右京七条一坊の西鴻臚館推定地でも指摘されている<sup>12)</sup>。西市は、平安京の遷都に先立って設置されており、市を管理する市司も初期の段階で設置されたと思われる。『拾芥抄』<sup>13)</sup>によれば、西市では、調査地の右京七条二坊四町に隣接する二坊五町が西市司にあてられたとされる。これらのことから、今回出土した2点の軒瓦は、西市司に関連する建物に葺かれた瓦である可能性が高い。

平安時代前期の遺構が確認できなかった要因については、一つは、周辺調査で平安時代の遺構が検出された場所に比べて、地山相当面の標高が高いことが上げられる。柱穴群や区画溝、土壌などが検出された平成9年度調査(表1-18)の地山検出レベルは標高20.3m、区画溝や井戸が検出された平成元年度調査(表1-22)では20.8~21.0m、土壌・溝・柱穴が見つかった昭和62年度調査(表1-25)では19.5~19.7mで、今回の調査で検出した地山層当面は、標高21.8~22.0mである。このことから、元来、微高地状に高まっていたために、後世に削平された可能性が高い。

もう一つ考えられる要因としては、市の遺構が痕跡の残りにくいものであった場合がある。塵屋の建物が、礎石もしくは礎板を置いた上に細い柱を立てるような構造であれば、遺構としての痕跡は残り難い。市は月の半分しか開かれなかったため、塵屋も簡易な建物であった可能性は考えられる<sup>14)</sup>。

## (2) 溝119について

調査区のほぼ中央で検出した中世の溝119は、幅4m、深さ1.25m、断面形は2段に落ちる逆台形で、堀とも呼べる規模と形状を示している。東から西に流れ、堆積状況からはかなりの水量があったと考えられるが、周辺調査では同様の規模を持つ溝の検出例はなく、その経路は不明である。成立および埋没時期は、溝の底部から16世紀末の土師器皿が出土しており(図8)、その頃には機能していたことは間違いない。また、17世紀前半頃の遺物を含む土壌に削平されるため、遅くとも16世紀末から17世紀初頭には埋められたと考えられる。この上層の埋め戻された土に15世紀末~16世紀初頭の遺物が多く混じる。溝を掘削した土を脇に積み上げて土塁とし、埋め戻しの際にその土塁を壊して埋土としたために、上層に掘削された時期より古い遺物が混じる例が左京五条四坊二町跡の調査で報告されている<sup>15)</sup>。今回の溝がそれと同様のものであるとすれば、16世紀初頭頃に掘削されたものと考えられ、溝として機能した期間はおおよそ百年と考えられる。左京域では、同じく室町時代後半の16世紀に入って、規模の大きい堀・流路が急増する<sup>16)</sup>。これは、度重なる土一揆や、応仁の乱を契機とした混乱の中で、防御のために構築された町組を囲む「構」の堀と認識されている<sup>17)</sup>。溝119の南側には同時期の柱穴が密集しており、過去の七条通南側に面した調査においても、通りに面して室町時代の柱穴が多数検出されている(表1-20~22)。既述したように、調査地は周辺より標高が高く耕作に不向きであったと思われることと、隣国丹波に抜ける重要な道であった現在の七条通に面することから、右京域の中では比較的大きな村が形成されていたと考えられ、この溝119は左京域の「構」の堀と同様に防御の目的で掘削されたものと

捉えておきたい。ただし、過去の調査で周辺は耕作地であったことがわかっており、従来湿潤な環境であることから、防御のためだけでなく、導排水の幹線としての機能も併せ持っていたと推測される。

### (3) 調査地付近の景観変遷

最後に調査地の景観変遷をまとめておきたい。無遺物層の堆積状況と標高から見て、調査地は平安時代以前から微高地であったと考えられる。しかしながら、弥生時代から古墳時代の遺物散布地の衣田町遺跡に関連する遺物は出土していない。微高地であれば、居住域もしくは墓域として利用されていた可能性があるが、平安時代前期の遺構と同様削平されたのであろう。平安時代前期には、明瞭な遺構の検出はないものの、出土遺物から見て、西市関連の施設が置かれたと考えられる。平安時代中後期の遺構は検出しておらず、遺物も乏しい。この頃以降、右京域が衰退し、耕作地化が進むと共に、湿地帯や空地が増加したようであるが、調査地付近は微高地であったことと、七条大路に面していたことから、鎌倉時代には村が形成され、この時期の遺構からは、韃の羽口や鉄滓などが出土しており、小規模な鍛冶を行っていたと思われる。室町時代の遺構は、溝119とその南側に多数の柱穴を検出した。七条大路に面して掘立柱建物が建ち並ぶ景観が復元でき、一時的に、それらを防御する目的で大規模な溝119が開削されている。江戸時代に入ると、井戸が数基検出されていること、軒瓦や築地塀に使用する塀瓦が出土していることから、塀で囲まれた宅地の存在が想定できる。現七条通が丹波街道と呼ばれ栄えたため、街道に面して規模の大きな屋敷が建ち並んだと推測される。

今回の調査では、以上のような景観変遷が考えられ、特に、西市に関連する軒瓦が出土したことから、溝119の検出により、左京域と比べ実態のよくわかっていなかった右京域の中世末期の様相の解明に繋がる資料を提示できたことは大きな成果と言える。

#### 註

- 1) 京都市埋蔵文化財調査センター『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2003年
- 2) 京都市編「東西市町の形成」『史料京都の歴史 第4巻』平凡社 1981年
- 3) 京都市編「市と商い」『史料京都の歴史 第3巻』平凡社 1979年  
菅田 薫「東西市」『平安京提要』角川書店 1994年  
また、藤原長兼の日記『三長記』の建久六年(1195)十一月の記事に昇子内親王の生誕百箇日の祝いの餅の調達に関して、「...今朝屬資兼自西市買之...」と記されている。この西市が、平安京の西市と同一とすれば、この頃までは西市の名が残り、かろうじて存続していた可能性がある。『増補 史料大成 三長記』臨川書店 1965年
- 4) 『京都市の地名』平凡社 1979年
- 5) 菅田 薫「東西市」『平安京提要』角川書店 1994年
- 6) 前掲註5) 文献に同じ
- 7) 木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年

- 8) 奈良時代の一本造り軒丸瓦については、鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年、同「一本造り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館 1990年に詳しい。
- 9) 平田 泰「平安宮中和院跡」『平安京跡発掘調査概要』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 10) 鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年
- 11) 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年
- 12) 前掲註10)文献に同じ
- 13) 「拾芥抄」『改訂増補故実叢書』22巻 明治図書出版株式会社 1993年
- 14) やや時代は下るが、13～14世紀に成立したとされる「一遍上人絵伝」に描かれた備前国福岡市(巻四 - 第三段)や信濃国伴野市(巻四 - 第五段)の廬屋は、細い角材を使用した板葺きもしくは藁葺きの簡素な建物である。  
『日本の絵巻20 一遍上人絵伝』中央公論社 1988年
- 15) 長戸満男ほか「平安京左京五条四坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 16) 山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年の中の、洛中の堀B型式がこれにあたる。その多くが桃山時代に埋められ、江戸時代まで残るものは少数である。山本氏はこの埋没の契機を織田信長の旧二条城築城と、豊臣秀吉の聚楽第・御土居の築造、また天正地割りによる町並みの再編と関連するものと指摘している。
- 17) 前掲註15)文献に同じ
- 18) 文献から、鎌倉時代にはこの周辺が「西七条」と呼ばれていたことがわかる。『平家物語』巻八「...宮いざなひまいらせて、西七条なる所まで出られたりしを...」

# 圖 版

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうしちじょうにぼうよんちょう(にしいち)あと							
書名	平安京右京七条二坊四町(西市)跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2005-6							
編著者名	柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 しちじょうにぼうよんちょう 七条二坊四町 (にしいち)あと (西市)跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 にししちじょうなかのちょう 西七条中野町  29番地	26100		34度 59分 11秒	135度 44分 18秒	2005年8月 3日~2005 年8月29日	190㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 七条二坊四町 (西市)跡	都城跡	平安時代	遺物包含層	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦、軒瓦				
		平安時代末 ~鎌倉時代	柱穴、土壇	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、土製品、軒瓦、石製品、金属製品				
		室町時代	柱穴、柱穴列、溝、土壇、土取り穴	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、平瓦、丸瓦、木製品、石製品、金属製品				
		江戸時代以降	柱穴、土壇、井戸、土取り穴	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、輸入磁器、土製品、棧瓦、軒瓦、道具瓦、木製品、石製品、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-6  
平安京右京七条二坊四町 (西市) 跡

発行日 2005年10月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 075-256-0961